

# 建設企業のための 新分野進出フォーラム

将来に向けて新分野進出を考える建設企業が今、増えています。そこで、(社)山口県建設業協会・やまぐち建設21の会の主催で、9月に山口市でフォーラムを開催しました。そのフォーラムの中から、基調講演とパネリストの4社の事例を紹介しましょう。

## ■土木建築国家の終焉

建設市場の低迷は一時的なものではなく、社会構造そのものの変化です。GDPに占める建設市場の割合は先進国になると低くなるのが常ながら、日本は2割を超えていました。これは非常に特異なことで、むしろ今後は普通の状態になるのだと考えられます。日本の建設市場は今、ピーク時の3分の1に縮小しており、就業者数は618万人。先進国の建設市場は普通GDPの1割未満。日本のGDPは500兆円ですから将来的な建設市場は50兆円で350万人。つまり雇用は4割以上減という状況が予想され、経営者の方は、10年後を見据えた経営計画を今ぜひ作って頂きたいと思えます。

## ■建設業の変化と関連分野進出

建設業の変化を見ると「新設からリフォームへ」という動きがあります。リフォーム市場は現在20兆円。将来25兆円産業になるといわれています。ただしこの分野はすでに激戦区です。建物を建てる



だけでなく、賃貸しをして、住む人も紹介し、維持管理、修理もするなど、多角化している会社が増えています。さらに建物の劣化状況や検査業務などのFイービジネスも今後増えるでしょう。また「開発から環境へ」という動きもあり、現在21兆円の市場は38兆円になると予想されています。屋上緑化などのクリーンビジネスは非常に有望で、国も緑化推進法案を準備中です。瀬戸物の産業廃棄物を活用して表面温度を下げる新舗装材を開発した建設会社、間伐材を活用して新舗装材を開発した建設会社もあります。リサイクルでは、建築廃材をシックハウス用炭ボードに開発した会社、産学民で木質複合材を開発した会社もあります。

## ■他分野への進出

北海道では農業に進出した建設会社が多く、複数の農場の農作業や有機栽培など高付加価値のものに取り組み例が多いのが特徴です。



パネルディスカッションの様子

「スーパードレン」も2年半前に開発。「地下設置式パイオガスプラント」も鹿野ファームさんと共同開発し、菊川町の牧場とコンポストも研究中です。農業分野の方たちは実績主義なので、進出は当初なかなか難しかったのですが、今は全国で使ってもらっています。他社の技術を購入しての新分野開拓も考え、「3Mスコッチプリント」というCGによる屋内外広告も今、手掛けています。企業は常に進歩していかないと生き残れません。今後も研究開発と経営努力を怠らず、取り組んでいきます。



株式会社 コプロス 宮崎 衛 会長



株式会社 安成工務店 安成 信次 社長

私は昔から挑戦することが好きで失敗もしましたが、それ故に今日があると思っています。当社は早くから下水道工事を手掛け、推進工事で先端障害による苦勞が絶えなかったことから、ケーシングを利用した立坑の掘削を考案。径5m深さ30mまで実績を作り、今も深さ40mを目標に開発中です。これをもとに色々な分野に進出。下水道やガス関連分野ではケコム工法の会社として知られるようになり、黒瀬賞・建設機械化奨励賞・国際非開削技術協会からの受賞も一層の励みになりました。農業土木の排水の効率をあげる「スーパードレン」も2年半前に開発。「地下設置式パイオガスプラント」も鹿野ファームさんと共同開発し、菊川町の牧場とコンポストも研究中です。農業分野の方たちは実績主義なので、進出は当初なかなか難しかったのですが、今は全国で使ってもらっています。他社の技術を購入しての新分野開拓も考え、「3Mスコッチプリント」というCGによる屋内外広告も今、手掛けています。企業は常に進歩していかないと生き残れません。今後も研究開発と経営努力を怠らず、取り組んでいきます。

グループ企業4社はいずれも住宅関連。環境やリフォーム分野が成長するだろうと狙い定めて展開してきました。転機の1つは、昭和58年にゼネコン体質から民間移行を決めたこと。そしてもう1つの転機が昭和63年頃に平成3年までの経費シミュレーションを行ったこと。そして我々が作るべき民間住宅はどんなものであるべきか悩んだ結果「環境共生」をテーマに、リサイクル紙を活用した断熱材の使用を決めました。お客様には自然素材で健康住宅であることが支持され、省エネ断熱構造工事デコストライ工法も全国35社に広がり、TVや雑誌等で認知度も高まってきたと感じています。土地の有効利用ということで賃貸マンションの開発も手掛けています。商業開発では土地を地主様からお預かりして、構想から開発・出店誘致・管理までトータルコーディネートして運営しています。しかし問題点もあり、平成6年頃に売上げが50億円を超えてから数年間頭打ちに。見直した結果、社内体制に問題があったことが分かり、人材育成を重視。人材が育つてきましたので、今後は拠点展開を進めていこうと考えています。



講演会講師 米田 雅子 氏

山口県生まれ。お茶の水女子大卒。現在、NPO法人「建築技術支援協会」常務理事・事務局長。同協会新分野進出研究会を主宰。東京工業大学非常勤講師、NHK「21世紀ビジネス塾」講師などを歴任。著書に『建設業の新分野進出』（東洋経済新報社刊）がある。

## ■パネルディスカッション

- 米田 雅子 氏
- 松屋産業(株)(岩国市/介護機器) 松塚 展門 社長
- 大谷建設(株)(宇部市/介護事業) 大谷 将治 社長
- (株)安成工務店(下関市/環境共生住宅) 安成 信次 社長
- (株)コプロス(下関市/環境・グラフィック) 宮崎 衛 会長



大谷建設 株式会社 大谷 将治 社長

当社は約15年前にコンサルタン卜から、固定収入を得て、そこから経費や社員の給料を賄うようにすればいいという助言を得て、不動産業も手掛けるようになり、賃貸事業も始めて現在10年目。この賃貸収入が今、事業の基盤となっています。6年前には別のコンサルタン卜から、今の80%の原価に抑えられるなら本業で生き残れるが、それが無理なら異業種の検討をと言われ、最初はリサイクル・環境分野を考えましたが、長期で取り組まないとならない。そこで考えたのが介護分野。住宅改修ならいける。折しも介護保険の開始間近だったので介護ショップの展開を決め、平成11年に「株式会社はんど」を設立。今では年間約2億2千万円を売り上げています。中でも用具レンタルが意外に伸びて今、収益の柱に。住宅改修は客単価が低く、手もかかるため、件数を増やさないとダメですが、宇部地区で35%のシェアを持つまでになりました。今後、大手がどう展開していくかを考えながら多店舗展開を図ろうと、培ったノウハウや事例を冊子にまとめて、ケアマネージャーに贈呈。信頼確保につながっています。

公共工事が削減される中、社会の潮流に合わせて何か新しいものに挑戦しようと福祉機器製造販売を始めました。単純に福祉とは、からだや心、社会を支えるということ。日本ではこの福祉の普及が遅れと問題点が多々あります。そこで福祉機器開発にチャレンジし、異業種交流で生まれたのが空気で動く車いすのリフト「ハートリフト」です。立体幾何学を応用して開発。特許を取得しました。石やタイル等、傷つけない仕上げ材の上に簡単に設置する事ができ、東京の国立博物館でも使ってもらっています。また、福祉のまちづくり等のパンフレットでは、L型手すりがよく紹介されています。しかし、身長は人によって違い、残存能力も加齢と共に低下していくので、これに合わせて付け替えなければならず、L型手すり一辺倒の考えは間違っています。そこで当社では誰でもどこでも掴める格子状手すり「ニアスリックス」を開発。今では家庭や病院でも使用され、オーク材のものは高級老人ホーム等でも使われています。起業で一番大事なのは、思考の連続と熟成。一つの事にとことんこだわって開発されると良い結果に繋がるでしょう。



松屋産業 株式会社 松塚 展門 社長

※山口県商工労働部新産業振興課には様々な支援制度があります。また雇用・能力開発機構にも様々な助成金制度があります。詳しくはそれぞれお尋ねください。